

大神、又坐能登國、氣多神、神代神、白比古神、又坐越中國、高瀨神、林神、鶴坂神、白鳥神、遊川神、又坐越後國、大前神、坂本神、荒河神、古井神社司等、依過穢神事、粟給、遣使科中祓、可令祓清奉仕事、又至來冬季、可有土公祟、越季初、祭治大宮四隅、京四隅、山城國六堺、兼祭日可供奉御禊事、此等式條事行治忌、慎給、御在所平氣、可御坐狀、下供奉給、奏、以前太兆爾下供奉留御體御下如件、謹以申聞、

康和五年六月十日

宮主從五位下行少祐下宿禰兼良

神祇官

中臣從五位上行權少副大中臣朝臣輔清

卜時推平否事

太兆爾下供奉、其常神應并諸例事、無漏久行治給、自來七月、至于十二月、東宮君平安、氣御坐哉、下間給、御下火數廿二火、直下十火、災下五火、地相下二火、天相下二火、神相下一火、人相下一火、地相下一火、以是下求爾、可有籠神祟乎、此二條事行治給、時推之内平安爾、可御坐之狀、下定所申如件、

康平六年六月十日

灼手正六位上下宿禰儀時

宮主正六位上行史伊岐宿禰奉政

中臣正六位上行少祐大中臣朝臣輔長

諸本大の字を脱す今例

同京四條坐神一座 大月次新嘗

同京四條は音讀也、同京は左京を云ふ也、○四條は今も明か也、拾芥抄宮城に、後院四町云々、又四町、三條南、四條坊門北、大宮西、壬生東、此内一町號三條殿、同扶桑略記に、天元四年七月八日癸卯、内裏上棟、天皇自宮廳遷御四條後院、首棟抄同、但し太政大臣以私また拾芥抄部上に、朱雀院、累代後院或號四條後院、三條北、朱雀西四町、四條北、西坊城東、中京京師園同、四條坊門、今繪師坊城今の押羅寺通の西とみえたり、俗言ながら都名所圖繪拾遺に、四條坊門千本通の東圃、中にあり、今小祠となる云々、世人はやくさと誤り、又誤り略して瘡神ともいふ、瘡毒平癒を祈願の者、土にて團子の形をこしらへ、土器に盛て神供とすとあり、恐らくは説述ふまじ、さはいへ、此所後院の跡にて、其時の社地とは定めがたくや、かく廢れたる後は、名に隨ひて、式社とも中奉るものづから神處にかなふべき、○大和志に、隼神祠在、南都角振町云々、事見成身院僧英俊天文十二年日錄と云へり、然れば當社も遷都の時、太詔戸神久慈真知神と同じく奉齋れるならんか、故大和國なるは此帳にも載せられぬは、當社を主と祭れるゆゑなるべし、東三條にては角振神隼神と二座に祭れるも、南都に由縁ありてきこゆるもの也、

隼神社

隼は波也布佐と訓べし、○祭神詳ならず、台記久安十年十月十七日己未、拜隼神、奉幣七ケ日時、料紙洞、道隆、國盛、神也、と見ゆれど、猶明ならず、今四條坊門千本東に在す、諸社根元記云、京中式内神内隼社坐朱雀院内坐、四條坊門油小路之小社、爲隼神者一説、而所載國史、坐朱雀院一畝、東三條内角振隼者各別事也、

にて補ふ、新印の四字、木に脱す今例